

式見・小江原について

本会幹事 吉野 誠次

1. 式見地区の概要

式見地区は、東は岩屋山、北は矢筈岳、南は舞岳などの山地に囲まれ、西は角力灘に面した地域である。

式見の名称は、鎌倉時代から檣(しきみ)の字を用いていたといわれている。志幾見の字を用いた文献も見られるが、慶長元年(1696)式見に改められ、現在に至っている。

昭和37年(1962)1月、式見村は長崎市に編入され、昭和46年(1971)2月名称変更により、式見町、向町、園田町、牧野町、四杖町、相川町、見崎町に細分された。

編入当時の式見村は人口約8,000人、世帯数約1,400戸、面積は約9.3平方キロメートルで、おもな産業は漁業であった。令和7年(2025)9月現在では、人口2,333人、世帯数1,283戸と減少している。

式見地区で有名なものに、明治28年(1895)から式見くんちの出し物となった「女相撲」、消防庁長官から表彰された「婦人消防クラブ」、「式見かまぼこ」がある。

2. 乙宮神社

乙宮神社の勧請年代は不明である。昔は神楽島飯盛岳に鎮座していたが、その後いつの頃か矢筈岳に遷座し、矢筈権現と改称した。

当時の祭日は9月9日で、9月7日矢筈岳より塩屋の辻という所へ神輿がお下りになり、お旅所は千切嶋の側にあって、満潮時は渡海できず、潮の引き加減によってお旅所へ臨幸したと伝わっている。

天正2年(1574)矢筈岳より千切嶋に遷座し、乙宮大権現と改称した。明治元年(1868)乙宮神社と改称し、郷社となった。現在の社殿は、昭和15年(1940)7月に改築されたものである。

3. 淡島神社と近海丸沈没事故

淡島神社は、正徳2年(1712)式見浦の郷士森嘉兵衛により勧請された。昭和3年(1928)社殿の改築が行われている。昭和38年(1963)現在の江川山一帯を整備し、昭和40年(1965)遷座式が執り行われた。

太平洋戦争が激しさを増していた昭和19年(1944)12月24日午後1時頃、乗客、乗員338人を乗せた長崎交通船株式会社の連絡船近海丸(26トン)が、三重、式見から長崎大波止に帰航中、西彼杵郡福田村小浦沖合に差しかかったとき、転覆沈没した。激浪



近海丸殉難者之碑

のなか、疎開していた学童を含む定員の4倍近い人が乗船し、さらにその一部が背負い荷とともに右舷に片寄り均衡を失ったことが転覆の原因だった。

沈没により、死者、行方不明者は実に273人にのぼり、生存者はわずか65人という痛ましい事故であった。平成6年(1994)12月淡島神社に「近海丸殉難者之碑」が建立された。

4. 小江原地区の概要



小江原第二団地とアパート群

昭和35年(1960)以前の小江原地区は、人口150人程度の寒村であったが、昭和39年(1964)県立長崎北高校が開校し、昭和41年(1966)

小江原第一団地、昭和49年(1974)小江原第二団地が造成されると、急速に人口が増加した。

現在の小江原地区の人口は、約7,500人。長崎市内では、滑石地区に続いて2番目に人口が多い地区である。

平成5年(1993)隣接する柿泊町に、長崎市総合運動公園の建設が始まり、約10年をかけて約62.5ヘクタールの運動公園が完成した。平成15年(2003)に開催された長崎ゆめ総体では、総合開会式、陸上競技などの会場となり、全国から多くの高校生アスリートが訪れた。

5. 小江原愛宕神社



小江原愛宕神社

小江原愛宕神社は、享保年間(1730年頃)に建立された小江原地区唯一の神社である。祭神は、火の神様「火産靈命」(ほむすびのみこと)で、防火のご利益があるとされる。参道の石段235段余りを上ると途中に金色の鳥居があり、さらに境内左より上ると祠がある。毎年10月の中旬には秋祭りが行われる。

本稿は令和7年12月例会の発表の要旨である。

参考文献

式見郷土研究会『式見郷土史』1986年